

わが国の教師の信念／ビリーフに関する研究の成果と展望

—多様な教育的ニーズに応える意識とは？—

Challenges and Opportunities for Research on Teachers' Beliefs in Japan

— Examining teachers' consciousness for addressing diverse educational needs —

辻 歩実, 小倉 正義

TSUJI Ayumi and OGURA Masayoshi

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 36 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.36, Feb, 2022

わが国の教師の信念／ビリーフに関する研究の成果と展望

—多様な教育的ニーズに応える意識とは?—

Challenges and Opportunities for Research on Teachers' Beliefs in Japan

— Examining teachers' consciousness for addressing diverse educational needs —

辻 歩実*, 小倉 正義**

*〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1 兵庫教育大学連合学校教育学研究科

**〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学

TSUJI Ayumi* and OGURA Masayoshi**

*Doctoral program student of the Joint Graduate School Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education
942-1, Shimokume, Kato-shi, 673-1494, Japan

**Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：本研究では、多様な教育的ニーズに応える教師の意識について検討するため、教師の信念／ビリーフに関する研究を概観した。その結果、教師の信念／ビリーフは、(1)研究によって定義や理解が異なること、(2)教師の指導行動や態度に正負両面の影響があること、(3)児童の学級適応感に正負両面の影響があること、(4)教師の精神的健康に影響すること、(5)学校段階や学校タイプによって教師の信念／ビリーフは異なることなどが明らかになった。そして、多様な教育的ニーズに対応できる教師の信念／ビリーフを客観視できる指標が必要であること、同じく多様な教育的ニーズに対応できる教師の信念／ビリーフを獲得する経緯を明らかにすることが課題となる。

キーワード：多様な教育的ニーズ、教師の信念、レビュー論文

Abstract： This study examined teachers' consciousness for addressing diverse educational needs by reviewing the research on teachers' beliefs. The results revealed that (1) teachers' beliefs were defined and understood differently in different studies, (2) their teaching behaviors and attitudes are both positively and negatively impacted by their beliefs, (3) teachers' beliefs positively and negatively affect children's classroom adjustment, (4) teachers' beliefs have an impact on their mental health, and (5) teachers' beliefs vary by school stage and type. Furthermore, an index that can objectively evaluate teachers' beliefs is vital to successfully address various educational needs, and it is challenge to clarify the process by which teachers acquire their beliefs.

Keywords： diverse educational needs, teachers' beliefs, review study

I. 本文

1. はじめに

2007年4月1日に改正された学校教育法は、特別支援教育の対象を通常の学級に在籍している生徒にまで拡充させた(文部科学省, 2007)。この改正学校教育法の施行から、通常の学級のユニバーサルデザイン化が課題となり、ユニバーサルデザインの学級・授業作りが進められてきた(宇野, 2020)。その中で担任教師の意識によって取り組み方に差が現れているが、この点について宇野(2020)は「ユニバーサルデザイン化とは単なる授業技法ではなく、学校・教師の意識改革である」と述べている。また、2021年1月にまとめられた「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議(報告)」

の中でも、「障害のある子どもの自立と社会参加を見据え、一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるよう、通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある多様な学びの場の一層の充実・整備を着実に進める」と示されている。しかし、学校・教師の意識改革であるという見解がありながらも、多様な教育的ニーズに対応できる教師の意識がどのように形成されているのかは明らかになっていない。GIGA スクール構想の中で個別最適化が謳われているが、この構想が進んでいる今だからこそ、多様な教育的ニーズに対応できる教師の意識について検討することには意義がある。

ところで、教師の「信念」は実践的過程の経験で養われた「暗黙知」と考えられ、それを駆使して生成

的に専門的な判断が行われることが指摘されている（佐藤，1996）。さらに，職業文化（教師文化）の中で，指導行動の意思決定に関わる「ビリーフ」を持つようになることも指摘されている（河村・國分，1996a）。教師の信念やビリーフの定義は後に詳しく述べるが，教師の信念やビリーフが指導行動に深く関わることを考えると，多様な教育的ニーズに対応できる教師の意識について検討するためには，これまでの教師の信念やビリーフに関する研究が参考になるだろう。

そこで本研究では，教師の信念とビリーフ（以下，教師の信念／ビリーフと記す）に関する研究を概観することで，多様な教育的ニーズに応えるために必要な教師の意識について検討することを目的とする。なお，本研究では，1995年から2019年までに日本で発表された教師の信念／ビリーフの研究動向を概観する。文献資料の選定については，J-STAGEの検索対象の論文を対象とし，「教師」「教員」＋「信念」「belief」「ビリーフ」をキーワードとして抽出した。さらに，そこから通常の学級の教師を対象とした研究を抜き出した。その結果，23件の文献が選択された。これらの論文を対象に，通常の学級の教師が持つ信念／ビリーフの概念を整理した。

2. 教師の信念／ビリーフの定義

教師の信念／ビリーフ研究を概観するために，まず信念とビリーフ，それぞれの定義について示す。信念とビリーフは英訳すると同じbeliefであるが，研究の背景が異なると考えられるため，本研究では区別して記述する。

教師の信念の定義は，黒羽（1999a，1999b）が指摘するように多義的であるが，一般的には実践的過程の経験で養われた「暗黙知」（佐藤，1996）であると考えられている。また，具体的な定義はせずに教師の信念を検討している研究も多いが，これらの研究では主に佐藤（1996）の指摘した「暗黙知」を信念であると位置付けていると考えられる。その中で，黒羽（1999a）は，信念の定義を多義的としつつも，信念の概念を整理し，「教師が教育行為の提唱について潜在的に保持する暗黙知であり，対教師や対児童との相互作用を通して抱く児童観や授業観等から教師の効力感や自己受容感等の感情を含む包括性の高い概念である」と定義した。また，田代・川原（2002）は，教師の信念を「教師が職務を行うにあたって心の中にある確固とした依りどころとなる考え方」と定義し，三島・淵上（2010）は「教師が教育活動を通して児童に伝えたいと思っている価値基準で，時に教師が意識していないことも含まれる」と定義している。このように，教師の信念は研究によって定義が異なる。また，観察や面接を用いた研究も多く存在し，統一された尺度が存在しないため，研究ごとに扱われている教師の信念は異なる。

次にビリーフの定義について述べる。河村・國分（1996a）は，Ellisによって提唱された心理療法である論理療法のフレームで，信念をビリーフとして捉えた。教師のビリーフは教師の個人的な資質・能力や性格に還元して理解するのではなく，教師特有の職業文化（教師文化）の観念から捉え，ビリーフを人が感情をもったり行動を起こす時に持つ思考（信念，価値観から構成された文章記述）であると定義し，論理療法の考え方の一つであるABC理論に信念を当てはめた。全ての結果（感情・行動：C点）は，出来事（A点）から直接もたらされるのではなく，ビリーフ（belief system：B点）を経てもたらされるという理論の，ビリーフの部分が教師の信念にあたるという考え方である（河村・國分，1996a）。ビリーフには論理的な前提のあるラショナル・ビリーフと，非論理的な前提のあるイラショナル・ビリーフがある。イラショナル・ビリーフは絶対的な「ねばならない型」の思考であり，強迫的な行動・感情に結びつくと考えられる（Ellis，1975 國分訳，1984）。河村・國分（1996a）は，実際の授業実践の観察から得られる表出した指導や行動を検討するのではなく，その時に教師が持つビリーフについて検討している。

このように，教師の信念とビリーフでは定義や理解が異なる。教師の信念は研究ごとに定義が異なるものの，教師が教育実践や児童生徒との関わりによって得た，指導行動を決定する知識であるという点では共通している。さらに，信念の研究はまず教育実践があり，その実践を行う教師はどのような信念を持っているのかという考え方からきており，教育実践とより深く結びついている。また，教師のビリーフは職業文化（教師文化）のように，個人要因よりも環境要因から形成されると考えられている（河村・國分1996a）。教師の信念とビリーフは異なるところも多いが，教師が行動する際の思考に関わるという点は共通した考え方であるため，どちらの定義も多様な教育的ニーズに応えることのできる教師の意識に関わる可能性が高い。

3. 「信念」が教師・児童生徒に与える影響

教師の信念は，児童生徒一人一人を大切にしている教育実践や，効率的な指導行動に結びつき，児童生徒の学級適応にも良い影響を与えることが明らかになっている。しかし，そのような指摘と同時に，信念が有効な手段を選択させない可能性や，子どもをマイナス方向に変容させる信念の存在も示唆されている。

黒羽（1999a）は，観察と面接を通じた事例を検討し，教師の信念を明らかにしようとしている。児童一人一人を大切にしている授業を行う教師の教育行為の基底には，効力感に満ちた肯定的な授業観・児童観などの信念が形成されていることを示した。また，日常的に自身の授業や

有り様を問い直す教師は、「教職観」を持っていることを示している（黒羽, 1999b）。ここでの「教職観」とは、教育行為の基底となる「教師は自身の授業に責任を持ち、子どもの成長を保障すべきである」「教師は、常に自分を高める努力をすべきである」「教師は自身や授業に対して誠実であるべきだ」「教師が本気で取り組めば、それ以上に子どもは応えてくれる」「教師の仕事（子どもを育てること）は、金銭に換えられない」などの信念が結合した、教師個人の信念体系のことである（黒羽, 1999b）。そして、黒羽（1999b）は、この「教職観」を持つ教師は、自らの教育実践を振り返りながら児童生徒により良い授業を届けようとしていることを明らかにしている。その後、田代・川原（2002）は、教師は信念をしっかりと持ち、不合理性の少ない伝え方をすることで、教師の精神的健康に対してプラスの効果が見られることを明らかにしている。また、三島・淵上（2010）は、「教師の信念からくる一貫した行動が児童の教師の認知像を作り、その認知像が、『自信・一貫性』という教師の潜在的な影響力となり、教師の指導行動をさらに効率的にしていく」と考察している。さらに、河崎・益川（2014）は、協調的な学びを取り入れている教師には、「学習者間の思考の多様性と対話が必要である」という信念があると指摘している。これらの研究から、授業実践や指導行動にプラスの影響を与える教師の信念があると考えられる。しかし、福本ら（2003）が教師のポジティブな信念尺度を作成し、各因子の得点について保護者と教師とで比較を行なったところ、教師は保護者に比べて「プラス思考」や「強化」というポジティブな信念が低いことが明らかになっている。ポジティブな信念は「児童生徒への教師のポジティブな関わりを支える態度」（福本, 2003）であり、ポジティブな信念を教師が持ち続け、教育実践に取り組めるかが重要であると考えられる。

さらに、子どもや教師に正の影響だけではなく、負の影響を与える信念があることも明らかになっている。新元（1999）は、「快活で規律があり、融和的な人間関係を持つ学級」と「陰湿で雑然とした、排他的な人間関係を持つ学級」の二つの学級の担任の関わりを考察し、「陰湿で雑然とした、排他的な人間関係を持つ学級」の教師は子どもをマイナス方向へ変容させる「ことばによる指導の重視」「他からの批判を受け入れない」「自らの教育方法に強い自信がある」「教育を技術として捉えている」の4つの特徴のある信念を持っていることを明らかにした。このような教師の信念は子どもをマイナスの方向へと変容させるが、「自己の信念を分析し批判する方法を教師は持っておらず、現実を客観的に判断することができにくいこと」「教師の信念は外部からの指導や管理ができにくいこと」が問題点であると新元（1999）は指摘している。また竹下（1999）は、「子ども同士のかかわ

り合いが優れた学習結果をもたらす」という信念に基づいて考案した授業と、個別授業を主とする授業の「子どもの考えの変容」を比較した。そして、個別授業を主とする教科で子どもの考えの変容が多くみられた研究結果に対して、その後に行った教師の指導法の追求では、16名中10名が前年度の結果を疑うかあえて無視する姿勢をとったことを報告している（竹下, 1999）。このように、教師が自らの経験のみを頼りに形成した信念を固持すると、これまで経験にない新しい整備や考えが教育現場に入ってきた時、それが自らの信念とそぐわなければ対応できなくなる可能性がある。

また西口（2000）は、小学校教師は授業中の落書きや、おしゃべり、怠惰な清掃活動については「叱るべきである」という信念を強く持っていることを明らかにし、小学校教師は児童生徒を統制する必要性を強く感じており、そのような信念は児童生徒の特徴に合わせた声かけや静観の行動を抑制することを示唆している。このように児童生徒を統制しようという信念は、教師の柔軟性を奪い、児童生徒の特徴や状態を多面的にみることを妨げる可能性がある。

これらのことから、教師は常に自らを客観的に問い直すことで、自らの経験からくる信念を固持することを防ぎ、より児童生徒の教育的ニーズにあった教育を提供できるのではないかと。しかし、教師の信念がいつ頃、どのようなきっかけで形成されたのかについてはこれまで明らかになっていない。そのため、教師の信念が形成されたきっかけとなった経験や知識を明らかにする必要がある。また、教師が自らの信念を分析する方法も確立されておらず、自らの信念や指導行動・態度を見直すことを促す取り組みや、自らの信念を客観視できる指標の開発が求められる。

4. 「ピリーフ」が教師・児童生徒に与える影響

教師の信念に関する研究を概観した結果、正負両面の影響があることが明らかになった。本項では、教師のピリーフが教師や児童生徒に与える影響について整理する。河村・國分（1995）は、教師のピリーフは教師の指導行動や態度、児童生徒の学級適応感に影響し、「～ねばならない」というようなイラショナル性の高い教師が担任する学級の児童生徒は、学級適応感が低くなることを指摘している。また河村・國分（1996b）は、「児童管理的なピリーフ」を強く持っている教師の学級では、児童生徒の学級適応感が相対的に低く、著しく学級適応感の低い児童生徒の割合が相対的に高いことを報告している。このように、小学校教師の持つイラショナル・ピリーフは児童生徒の学級適応感に負の影響を与えることが示されてきている。さらに、河村・田上（1997）によると、教育実践に関するピリーフの強迫性が相対的に高けれ

ば、児童生徒のスクール・モラルも低下し、『児童管理的なピリーフ』を持っている教師の学級は、評価基準が教師のこうであるべきという生徒像に当てはまるか否かであり、教師のこうあるべきという生徒像から外れた児童生徒は評価されず、学級適応感も下がるのではないかと述べている。多様な教育的ニーズを持つ児童生徒は、このような教師の持つ「理想的な生徒像」に当てはまる児童生徒とは言えない可能性もあり、評価の基準から外れることで学級不適応を起こす可能性も高くなると思われる。

さらに、児童生徒の学級適応感だけではなく、教師の精神的健康にもピリーフが関係していることが明らかになっている。土井・橋口(2000)は、イラショナル・ピリーフ得点が高いほど教師の精神的健康度が低いこと、大澤・宮下(2007)は「教師としての適正感」のピリーフを持つ中学校教師はGHQ30の「一般的疾患傾向」「身体的症状」「睡眠障害」「社会的活動障害」「不安と気分変調」「希死念慮うつ傾向」をもち、また「他者不信感」を持つ教師は「一般的疾患傾向」「身体的症状」「睡眠障害」「社会的活動障害」「不安と気分変調」「希死念慮うつ傾向」を持つことを明らかにしている。教師の精神的健康度の低下は、児童生徒一人一人に対応する教師の精神的な余裕を奪う可能性がある。また、野中・坂中(2007)は、イラショナル・ピリーフは教師のカウンセリング・マインドや児童生徒への共感の態度に関係し、教師と児童生徒の学級の評価のずれを強める傾向が見られたと報告している。この教師と児童生徒の学級の評価のずれは、学級適応感に影響することも考えられる。このように、イラショナル・ピリーフが教師の行動決定や児童生徒への指導行動にも影響すると考えられる。

しかし、ピリーフにはイラショナルなものだけではなく、ラショナルなピリーフも存在する。高内(2006)の教師のラショナル・ピリーフが集団に与える影響について調べた研究では、教師の持つピリーフが児童生徒に良い影響を与え、管理意識が高くても「子どもの主体性を尊重する」というピリーフを教師が持っている、児童生徒の友人関係に良い影響を与えることが明らかになっている。教師は、管理意識を持ちながらも「主体性の尊重」という意識を持つことで児童生徒への態度や行動が変化すると考えられる。鈴木(2008)は、河村・國分(1996a)のイラショナル・ピリーフの項目の中でも、「教職への熱意」として再構成された因子を強く持つ教師は「教師-生徒関係」「同僚関係」「教育上の効果」の得点が高いことを明らかにしており、「教職への熱意」はラショナル・ピリーフであると指摘している。さらに、茅野(2010)では「生徒認知の多様な教師」は「教師の熱意・使命感」というピリーフが強いことも明らかになっており、熱意や使命感のある教師が研修を受けることで、より「生徒

認知を多様にできる」と考察している。このように教師は、イラショナル・ピリーフを持っていたとしても、児童生徒や自身に良い影響を与えるラショナル・ピリーフも同時に持っている可能性があるだろう。また、ラショナルと考えられるピリーフでも、それを固持してしまうと、児童生徒対応への柔軟性が奪われイラショナルなピリーフに変容する可能性がある。河村・田上(1997)は自らのピリーフを検討することが指導行動や態度の検討に繋がると指摘しており、指導行動や態度を振り返るためには教師自らがどのようなピリーフを持っているのかを客観的に検討することが重要であると思われる。客観視できる指標があることは、教師が自らの指導行動や態度を振り返るきっかけの一つになると思われる。

また、鈴木(2008)は教師のピリーフを測定する項目について抜本的な内容の見直しが必要である可能性を指摘している。その理由として、河村・國分(1996a)の教師のピリーフ尺度の項目を再構成する中で、ラショナル・ピリーフともイラショナル・ピリーフとも言えない項目が存在したことをあげている(鈴木, 2008)。このことから、多様な教育的ニーズに対応できる教師のピリーフを検討するためには、これまでのピリーフ項目を再検討する必要があると考えられる。

5. 学校種・学校タイプ別のイラショナル・ピリーフ

前項では教師や児童生徒に影響を与えるピリーフについて整理した。前述したように、ピリーフは個人的な資質や能力、性格に還元して理解するのではなく職業文化(教師文化)と捉えられている。しかし、小学校、中学校、高等学校などの学校種別で職業文化(教師文化)は異なる可能性もあり、高等学校ではそれぞれの学校タイプでも異なる職業文化(教師文化)を築いている可能性がある。そこで本項では、学校種や学校タイプ別に存在するイラショナル・ピリーフについて述べる。

小学校教師は一般的に「ねばならない型」のピリーフを持ち、管理的な傾向があることが明らかになっている(河村・國分, 1996a)。渡部・加世田(2004)は、そのような強迫的なピリーフは、幼稚園教師に比べて小学校教師の方が強く持っていることを示した。さらに、強迫的なピリーフが薄い小学校教師は、児童生徒の多様な面を見て評価する考え方を持っており(渡部・加世田, 2004)、この多様な面を見て児童生徒を評価する考え方はさまざまな教育的ニーズに対応するために必要な考え方であると思われる。また、小中高で教師のピリーフについて検討した結果、「毅然とした集団指導」というような管理的なピリーフは小中高全ての教師に共通してみられるイラショナル・ピリーフであり、「教師-生徒関係」に負の影響をもたらすことが明らかになった(鈴木, 2008)。また同研究では、小学校教師と中学校教師は「教

職への熱意」という「教師-生徒関係」「同僚との関係」「教育上の成果」へ正の影響を持つラショナル・ビリーフを持つことも示された。

このようにすべての学校段階の教師に管理的なイラショナル・ビリーフが存在することが示されたが、これは小学校から高等学校までの通常の学級で行われているのは主に集団指導であり、多くの児童生徒をまとめ、集団指導を行うためには教師が管理・指導的な行動を取らなければならない状況は多く、そのような環境から強迫的で管理・指導的なビリーフが形成されることがあるのではないかと考えられる。また、渡部・加世田(2004)は、強迫的なビリーフが薄い小学校教師は、強迫的なビリーフが強い小学校教師に比べて、児童生徒の多様な面を見て評価する考え方を持っているとしている。このことから、多様な教育的ニーズに応えるためには、強迫的なビリーフを薄くすることが必要になると考えられる。

鈴木(2008)は、高等学校には学校間にさまざまな差異があるため多くの高等学校に共通する特徴を見つけ出すことが難しいと述べている。藤原・河村(2012)は「非進学校」は「生徒管理・生徒指導」と「権威・役割志向の教師の対応」というビリーフを抱えている教師が相対的に高いことを明らかにしており、本田・河村(2019a)は高等学校教師のビリーフに関して、学力低位校は学力上位校・学力中位校と比較して「特別視への抵抗」が強いことを示した。小学校や中学校は、高等学校のように学力でのタイプ分けは難しく、一概に語れないが、管理・指導のビリーフが強くなると、多様な教育的ニーズへの対応が難しくなることが示唆された。また、本田・河村(2019b)は学力低位校の教師は、学力上位校・学力中位校の教師よりも管理的なビリーフが高いことを明らかにしており、学力低位校には多様な教育的ニーズがあるにも関わらず管理的なビリーフが高い理由として、授業不成立を回避し、学校や授業の秩序維持を重要視している可能性、生徒の困難さへの理解不足等がある可能性を考察している。

また、高等学校教師のビリーフが学校タイプによって異なること、小中の教師と比べてラショナル・ビリーフが認められないこと理由は検証されておらず、ビリーフが形成される経緯を学校段階別、学校タイプ別に明らかにすることが今後の課題である。

6. おわりに

教師の信念／ビリーフに関する研究を概観し、多様な教育的ニーズに応えるためには、「教職観」や「教職への熱意」を持っていること、自らの経験からくる信念を固持することや強迫的に管理主義的なビリーフをもつことを防ぐことが必要である可能性が示唆された。そして、自らの信念／ビリーフを客観的に評価できる指標があ

り、教師が自らの信念／ビリーフを振り返ることができれば、自らの経験からくる信念を固持することや強迫的に管理主義的なビリーフをもつことを防げると考えられた。そのために、多様な教育的ニーズに応えるための指導行動と相関が高く、自らを振り返るのに適した教師の信念／ビリーフ尺度が必要である。今後、開発が期待される。

また、教師の信念／ビリーフがどのようなきっかけで形成されたか明らかになっていない点も課題である。教師の信念／ビリーフは児童生徒に正負両面の影響を与えることが示されたが、そのような信念／ビリーフをどのように獲得したのかは明らかになっていない。多様な教育的ニーズに対応できる信念／ビリーフの形成する経験や環境因を明らかにすることが求められる。

これらの課題を解決することで、多様な教育的ニーズに対応できる教師の意識への働きかけが可能になり、児童生徒一人一人に行き届いた教育実践が学校現場で展開されていくことが期待できる。

II. 引用文献

- 土井一博・橋口英俊(2000). 中学校教師におけるイラショナル・ビリーフと精神的健康との関係 健康心理学研究, 13(1), 23 - 30.
- Elis, A(1975). How to live with a Neurotic at Home and at Work. New York; Crown Publishers, Inc.(エリス, A. 國分康孝(監訳)(1984). 神経症とつきあうには川島書店)
- 本田真・河村茂雄(2019a) 特別支援教育における「個に応じた指導」を妨げる高校教師のイラショナル・ビリーフの検討-学校タイプによる差異に焦点をあてて- 学級経営心理学研究, 8, 29 - 35.
- 本田真・河村茂雄(2019b). 多様な教育的ニーズを持つ生徒の指導に関する高校教師のビリーフ-学校タイプの比較から「学力低位校」に焦点を当てて- 日本教育心理学会総会発表論文集, 61, 471.
- 藤原和政・河村茂雄(2012). 高校教師の教師特有のビリーフに関する一研究-学校タイプの視点から- 学級経営心理学研究, 1, 13 - 20.
- 福本いく子・堀明人・佐々木和義(2003). 教師のポジティブな信念・かわりが教育活動に及ぼす影響(1)-高校教師の生徒に対するポジティブな信念の測定- 日本教育心理学会総会発表論文集, 45(0), 631.
- 茅野理恵(2010). 中学校教師の生徒認知の多様性を規定する教師の要因の検討 筑波学院大学紀要, 5, 81 - 91.
- 河村茂雄・國分康孝(1995). 教師特有のビリーフと児童の学級適応についての考察 日本教育心理学会総会発表論文集, 37(0), 535.

- 河村茂雄・國分康孝 (1996a). 小学校における教師特有のビリーフについての調査研究 カウンセリング研究, 29, 44 - 54.
- 河村茂雄・國分康孝 (1996b). 教師にみられる管理意識と児童の学級適応感との関係についての調査研究 カウンセリング研究, 29, 55 - 59.
- 河村茂雄・田上不二夫 (1997). 教師の教育実践に関するビリーフの強迫性と児童のスクール・モラルとの関係 教育心理学研究, 45 (2), 213 - 219.
- 河崎美保・益川弘如 (2014). 協調的な学びを取り入れた授業の実践を支える教師の信念 日本教育心理学会総会発表論文集, 56, 393.
- 黒羽正見 (1999a). 授業行為に表出する「教師の信念」に関する事例研究－ある小学校教師の挿話的語りに着目して－ 日本教科教育学会誌, 21 (4), 27 - 34.
- 黒羽正見 (1999b). 教育行為に表出する教師の信念に関する事例的考察－公立 S 小学校対象のエスノグラフィーを通して－ 日本教師教育学会年報, 8, 89 - 97.
- 西口利文 (2000). 指導に対する教師の信念は児童への言葉かけに影響するか 日本教育心理学会総会発表論文集, 42, 383.
- 野中真・坂中正義 (2007). 教師のカウンセリング・マインド認知に関する研究－教師のイラショナル・ビリーフとの関連, 及び学級雰囲気評価への影響から－ カウンセリング研究, 40, 105 - 115.
- 三島美砂・淵上克義 (2010). 学級担任教師の信念と指導行動との関連 日本心理学会大会発表論文集, 74, 1179.
- 文部科学省 (2007). 学校教育法の一部を改正する法律について (通知) 文部科学省, https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07081705.htm (2021 年 9 月 30 日)
- 文部科学省 (2021). 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議 (報告) 文部科学省, https://www.mext.go.jp/content/20210208-mxt_tokubetu02-000012615_1.pdf (2021 年 9 月 30 日)
- 大澤洋子・宮下敏恵 (2007). 中学校教師特有のビリーフに関する研究(2) 日本教育心理学会総会発表論文集, 50, 237.
- 佐藤学 (1996). 実践的研究としての教育学－技術的合理性に対する批判の系譜－ 教育学研究, 63 (3), 278 - 285.
- 新元龍児 (1999). 教師の「信念」と子どもの変容 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 271.
- 鈴木郁子 (2008). 学校教師のビリーフに関する研究－小学校・中学校・高等学校教師の比較－ 人文学部研究論集, 19, 41 - 51.
- 高内健 (2006). 教師の価値観と児童の学級適応との関連－教師のラショナル・ビリーフと教師タイプからの検討－ 日本教育心理学会総会発表論文集, 48, 223.
- 竹下由紀子 (1999). 指導法についての信念と「授業研究」結果の不整合に対する教師の反応 日本教育心理学会総会発表論文集, 38, 394.
- 田代知葉・川原誠司 (2002). 教師の持つ信念とその不合理性についての研究(1)－信念と不合理性の様相に注目して－ 日本教育心理学会総会発表論文集, 44, 79.
- 宇野宏幸 (2020). 学びをめぐる多様性と授業・学校づくり 金子書房.
- 渡部玲二郎・加世田直巳 (2004). 幼稚園教師と小学校教師の子どもをみる視点について－子どもの幼稚園から小学校への円滑な意向の一助として－ カウンセリング研究, 37, 124 - 134.